



(横須賀)

神奈川・北条泰時ほうじょうやすとき・時頼邸跡ときよりてい

- 1 所在地 神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目
- 2 調査期間 一 一九八八年第一次調査 一九八八年(昭63)六月～七月
二 同第二次調査 一九八八年八月～九月
- 3 発掘機関 鎌倉市教育委員会
- 4 調査担当者 菊川秀政
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 一三世紀前半～一四世紀後半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡地は、北条泰時・時頼邸跡にあたる。当該期は、幕府が嘉禎二年(一二三六)に若宮大路東側に移転した時期にあたり、この地域の屋敷地所有者の変遷などを論じた秋山哲雄氏によると、この屋敷地は北条泰時の次に執権となった経時

に譲られる。経時の死後、宝治元年(一二四七)頃、重時に継承された。その後は不明としながらも北条氏との関わりを指摘している(秋山哲雄「鎌倉中心部の形成とその構造―都市鎌倉における若宮大路の意味―」『都市研究の方法』新人物往来社、一九九九年など)。

第一次調査は、横大路と接する地点である。検出された遺構は、東西溝(横大路側溝)と塀もしくは柵と考えられる柱穴である。木簡は、一三世紀第Ⅱ四半期の横大路側溝である溝二から一点出土した。なお、ここで提示した年代観は、宗臺秀明氏の年代観によるもので、一三世紀中葉から後半までとする報告書刊行段階の年代観とは必ずしも一致しない(横小路周辺遺跡発掘調査団「横小路周辺遺跡二階堂字横小路一〇番三地点―永福寺関連遺跡の調査―」一九九六年など。なお、報告書の年代観は、河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」『古代末期―中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古同人会、一九八六年に依拠している)。

第二次調査は、建築基礎杭によって遺構が破壊される部分に設定された四方所のトレンチ調査である。調査地点は小町大路に接しており、いずれのトレンチでも小町大路西側溝が検出された。なかでも南西側トレンチでは、側溝護岸のための木組が良好に残る。土層観察によると、側溝には数度の造り替え痕跡が認められる。

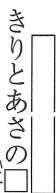
木簡は、最も東の側溝埋土から出土した。一括してとりあげたため共伴遺物などは不明であるが、報告書は一三世紀前半のものだと推

定している。

8 木簡の積文・内容

一 第一次調査

(1) 「三けんい



【事カ】

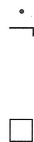
426×(30)×10 051

半数近くの文字を欠損しており、詳細な内容は不明である。「三けん」は、三間と解釈できる。類例は、若宮大路側溝出土の木簡に求められ、それらは上段に「間」や「丈」などの長さを表す文字が記され、下段には御家人もしくは御内人などの人名が記されるものがある(本誌第一八号)。石井進・松吉大樹両氏によると、これらの若宮大路側溝出土木簡は、側溝構築工事との関係が指摘されており、本例も同様の性格が考えられる(石井進「鎌倉から出土した最初の木簡」『日本歴史』四四九、一九八五年。松吉大樹「鎌倉・北条小町邸(泰時・時頼邸)雪ノ下二丁目三七七番七地点出土の人名木簡についての考察」『鶴見考古』二、二〇〇二年、など)。しかしながら、現段階で判読できた文字に人名と考えられるものはない。「きりとあさの【事カ】」は、「桐と麻の事」もしくは「切土浅の事」と解され、前者ならば物品に、後者ならば土木工事に関わるが、いずれにせよ意味は判然としない。なお、四文字目の「い」は、順番を示すイロハの「イ」と考

えられる。

二 第二次調査

(1) . []



(55)×(25)×2.5 081

頭部は水平に切られている。表裏ともに墨書は薄く判読はできない。文字数の推定も困難である。形態からすれば、折敷の底板の可能性がある。

9 関係文献

鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書五 昭和六三年度発掘調査報告』(一九八九年)

(鈴木弘太)

